

座長コラム「長岡の風」

第26回 2026年9月

「長岡の歴史が見えない」

長岡経済・産業連携会議（座長：高野裕）

中学一年生の孫が夏休みで1週間ほど長岡に泊まりに来た。歴史好きということで街中の河井継之助記念館、山本五十六記念館、県立歴史博物館、長岡戦災資料館など巡った。他にどこかと聞くと春日山や川中島などという。では、上杉謙信つながりで栃尾城址に行ってみようとなった。栃尾城址は栃尾の町から見上げた山の上にある。車で頂上近くまで登れ、そこから徒歩10分。実に見晴らしの良い場所、空堀やら狼煙台やらと歴史をリアルに感じられる場所だ。山頂を下りて町中を散策、上杉謙信に関する像が目につく。

私が長岡の歴史を語る時、牧野家が三河から長岡に入って400年というあたりから始まる。次に明治維新の河井継之助、小林虎三郎の米百俵、山本五十六、長岡空襲、中越地震、フェニックス花火と続く。そして一気に5千年ほど前の火焰土器まで話が飛んでゆく。そこで、いつも思うのだが、この牧野家から火焰土器の間がなかなか見えない。

今回、県立歴史博物館で「堀直寄の系譜」展が行われた。昔、祖母から牧野殿様の前は堀丹後守という殿様が蔵王においでだったと聞かされた。確かに蔵王神社周辺に行くとお堀の跡が現存し、流鏝馬や信濃川でとれた鮭を料理する儀式など今でも続いている。堀直寄という武将が長岡城築城の計画を立て、計画が進行していたところへ牧野氏がやって来て、長岡城を完成させ牧野氏が長岡藩を開府した。堀氏にとっては、何やら牧野氏に横取りされたように思えた。

しかし、調べてみるとこの堀丹後守直寄はなかなかの「すばしっこい」人物のようだ。13歳の時にあの豊臣秀吉の小姓になったという。そして21歳で魚沼郡坂戸城2万石。秀吉の死後は家康に鞍替えし、飯山藩4万石、駿府城火災での貢献で美濃多芸郡1万石、大坂夏の陣での功績大、家康の重病の折、寝殿に呼ばれるなどして、1616年徳川家康が亡くなると3万石加増されて長岡の領主となる。その2年後さらに2万石加増されて長岡から村上藩に移った。その時、代わって長岡の藩主となったのが牧野氏。しかし牧野氏は幕府の要職にあり、1630年まで長岡に入国できず1657年まで「堀丹後守御証文通り」として、「直寄の制度をそのまま踏襲し、いささかの不便もきたさなかった」ということである。（以上出典: フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』堀直寄の項より）

この堀直寄という人物、幕府の命令で長岡から村上へと移されて可愛そうなイメージを持っていたが、どうもそうではなさそうだ。いわば、転職しながらキャリアアップしてトントンと大企業の社長に出世するヤツ、秀吉のようなイメージだ。それに比べて、牧野氏は国政に忙しく、長岡のことは部下に任せっきりのイメージだ。

さてさて、400年前の牧野氏、その前に堀氏、さらにその前は上杉氏。この辺りから縄文までの長岡の歴史が見えない。今後はこの辺りをもう少し掘り起こさねばと思ったこの夏であった。